



ユネスコエコパーク が描く只見の未来

只見ユネスコエコパーク（仮称）の登録と、その推進を図ることや、町民皆さんのこの事業に対する理解を深めていただくこと、さらに主体的な参加と活動を展開していくことが必要であることなどから、学識経験者や先進地の方を招き、ユネスコエコパークについて学び、議論することを目的に、11月18日、季の郷湯ら里で「ユネスコエコパーク地域シンポジウム」が開かれました。



▲貴重な意見が聞かれたディスカッション

オープニング

「ユネスコエコパークが描く只見の未来」をテーマに開かれたシンポジウムには約140人が参加、主催者あいさつで目黒町長は「先祖から受け継いだ地で生命や財産を守り、次世代に伝える責任がある。自然と生命を慈しみ、人の営みのあり方を見つめ直し、皆さんと考え、只見ユネスコエコパークを全国に発信していきたい」と述べました。続いて、浅井孝司日本ユネスコ国内委員会事務次長、鈴木克昌福島県生活環境部次長が祝辞を述べました。

ユネスコエコパーク地域シンポジウム

第一部 世界から見た 只見ユネスコエコパーク

5名の皆さんから、それぞれの表題について、お話をいただきました。

「只見の自然の特徴と価値」

▽**櫻村利道** 福島大学名誉教授
福島県で一番雪が深い。貴重な雪食地形が多い。多彩な自然環境で希少種が多い。エコパークへの登録で新たな発展が望まれる只見の自然。

「佐渡フィールドセンターにおけるエコツーリズム」

▽**崎尾均** 新潟大学教授
自然散策ツアーや、蒲生岳のトレッキングを行なってみてはどうか。ゾーニングやルートの設定、ガイドの養成などが重要。

「遺伝的多様性の保全を図るBRの役割」

▽**吉丸博志** 森林総合研究所 多摩森林科学園園長
遺伝的多様性での個性を大事にしたい。同じ種の中の個性的遺伝は遺伝的資源となるので重要。地域の財産として遺伝的資源を残すことが大切。

「BR国際ネットワーク会議報告」

▽**酒井暁子** 横浜国立大学准教授
現在のユネスコエコパークは117国内で598カ所存在す

る。世界の気候変動とエコパークとの関連や改善点などを協議している。メディアの活用で地域をPRしていくことが重要。

「綾ユネスコエコパーク設定までの経過」

▽**朱宮文晴** 日本自然保護協会 保全研究部長

▽エリアは2市、2町、1村が関わる。森林が80%。1960年代から自然にやさしい様々な取り組みを実施（有機農業など）。景観に配慮し、景観条例も制定。ガイドボランティアの養成、ガイドブック作成、各種イベントの実施（照葉樹林サミットの開催など）。地元から主体的に情報発信している。町の人間と外の人間との関係が身近。一つ一つの取り組みの積み重ねが有効であり重要。ブランドロゴが各所で使われPR効果が向上する。結果として地域の活性化につながる。

第二部 記念講演

【演題】

ユネスコエコパークを通じた地域活性化と綾町の取り組み

【講師】

河野耕三氏

（宮崎県綾町役場企画財政課 照葉樹林文化推進専門監）

今年7月に「綾ユネスコエコパーク」として登録が決定し、世界に認められた宮崎県綾町で照葉樹林文化推進専門監として活躍されている「河野耕三氏」を招き、記念講演が行われました。河野氏は、綾町がエコパーク登録への申請を行なったきっかけや、申請に至るまでの歴史的背景と経過、申請前までのエコパーク的取り組みの実績、取り組みの総合評価として申請を行なったことなどについて、詳しく説明されました。そのなかで、綾町は、エコパークの登録を目的に活動してきたのではなく、今までの積み重ねがエコパークの理念に合致し認められたものと話され、これから100年かけてエコパークを核としたまちづくりに取り組み始めている現状も述べられました。河野氏は、学生時代から全国の植生調査を行なっている植生・植物社会学の第一人者で、これまで30年近く綾町の照葉樹林保護や照葉樹林プロジェクトなどにかかわられています。

綾ユネスコエコパークは：

- ▽総面積 14,580ha
- ▽核心地域 682ha
- ▽緩衝地域 8,982ha
- ▽移行地域 4,916ha

となっております。

はじめに、渡部勇夫総務企画課長から「ユネスコエコパークで只見町は何を目指すのか？」について問題提起があり、只見町の概要や課題、ユネスコエコパーク登録への期待などについて述べました。

その後、パネルディスカッションに入り、鈴木和次郎町プラセンター館長の進行により9名のパネリストが意見を述べましたので紹介します。



檜村 利道 氏
福島大学名誉教授

▷自然に直に接し学んでいくためにコースを決めガイドをつける。学習するためのデータベースをつくる。調査研究を行う。



崎尾 均 氏
新潟大学教授

▷魅力ある自然をうまく語れる、伝えられる人材（ガイド）を育成していくことが重要であり必要になる。



吉丸 博志 氏
森林総合研究所
多摩森林科学園園長

▷ガイドの養成、教育に役立つ調査結果を残していく。情報を保存しておくことが大切。



酒井 暁子 氏
横浜国立大学准教授

▷自己発見することから始めていく。主体的に計画を立てていくことが必要。町が一丸となつての取り組みを。



朱宮 丈晴 氏
日本自然保護協会
保全研究部長

▷地域にとって何を将来に伝えていく必要があるのか考える。子孫へ豊かな自然を残していくことが重要。綾町のエコパーク登録までの取り組みは自然保護の画期的な取り組み。



河野 耕三 氏
宮崎県綾町照葉樹林
文化推進専門監

▷地域住民が何ができるか考え、役場がサポートしていく。この構図ができれば将来的に外から注目される町になる。興味をもたれる町に変わっていく。



佐藤 順子 さん
(入叶津)

▷出稼ぎに行かなくても商売ができる町、希望の持てる町になることを願っている。エコパーク登録になっても夢と希望の持てる明るい町になることを願う。



鈴木 サナエ さん
(只見)

▷エコパークという全世界の冠がつけられればすばらしい。子どもたちが自然に対する心を養っている。只見の自然が教育の中心になればすばらしい。



目黒 道人 さん
(舘ノ川)

▷自然保護と自然の暮らしについて学んでいきたい。普段生活している只見のすばらしさを学んでいきたい。外から只見を訪れ、自然に親しみ学んでもらう。それが地域活性化に繋がってほしい。

「町民みんなで考え、取り組みましょう！」